

主婦の霞ヶ浦沿岸漁民ルポ

広瀬貞子

「ベチャ、ベチャ、ビー」

「フィフィヘー」

「ファア、ファアー、ファアー」

側で新聞を読んでいる私のハズに、

「これ、何語に聞こえる？」

と、尋ねたら、

「そんなのわかるわけあるか」

という返事。誰れにもわかるわけがありません。私の想像した未来の土浦弁なのである。

もしも、脳がおかされて、こんな言葉しか言えなかったり、手が片方なかったり、足が曲ったりした人間が私たちの土地に、私たちの子孫として棲息するようになつたとしたら。これほどひどくないにしても、私たちの子供の孫あたりにも、五体が健全でない人間がぞくぞく生まれ出したとしたら……

私は、一人息子が産声をあげた時のことを時々思い出す。

「オギャアー」という一声にまず「ああ生きて産まれたんだなあ」という感激を味うと同時に、「五体が満足でありますように」と、祈るような気持ちで待っていたところ、お湯をつかって測りにかけられた時、手が籠からはみ出て、五本の指が揃って見えた時の感激は七年も前のことなのに、いまだに目に見えるような気がする。

子供を産む人間にとって五体満足な子供を〴〵ということは最少限の願いのはずだ。いまや自然界の汚染は、私たちのこの最少限の願いさえもぎとろうとしているのではないかと思う。

こんなことで、茨城放送の「主婦の日曜マイク」の制作にあたって「水」は、今までのうち最もやりがいのあるテーマであった。

霞ヶ浦のドブ臭い、カビ臭い、カルキの臭いのするマズイ水は毎日飲まされているが、蛇口を通らない霞ヶ浦の水と生活をしている漁民は、どのように考えているかということ、仲間と沿岸漁民のルポに出かけていた。

市の中心部から十五分程すると私たちの住む土浦が対岸に広がって見え出した。湖を囲んでこんもりとした美しい丘のように見えるのが土浦市だった。単純な私は、「ウアー、素敵だね」と思わず声を出してしまいたいそ